

---

# とある異能の拒絶体質

ファミリア

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある異能の拒絶体質

### 【コード】

N6082W

### 【作者名】

ファミリア

### 【あらすじ】

あらゆる異能の力を拒絶してしまう体質を持った吉梨竜治。故に少年は無能力者だった。

## 超電磁砲

### とある異能の拒絶体質

「チクショー！ 何でこうなるんだよー！」

夜の学園都市を吉梨竜冶きつなしりゅうじは駆けていく。いちやつくカップルの横を通り抜け、階段を一段飛ばしで駆け下り、都市部からどんと離れていった。

七月一九日。

夏休み前日だからと言って、普段やらない夜ふかしをするための食料を買いにコンビニに行ったのが運の尽き。と言うか元々運なんてモノはない。

そもそも、買い置きしておいた非常食やお菓子すべての賞味期限が切れてしまっているのがおかしい。

普段どれだけ確認していなかったのか、自分自身に嫌気が指してきそつだ。

そんなコンビニへと向かう途中で、不良に絡まれている女の子を見て助けてあげようと思ってしまうたのがいけなかったのだろうか？  
もちろん分かっていた。

こんな風になってしまいうんだろうなあ、なんて予め予想は出来たはずだ。

にも拘わらず、行動を起こしてしまうのは正確に問題ありかもしれない。

そして、結果どうなったかと言うと

「待ちなさい！ 逃がさないからね！」

あるうことか、その少女の友達に不良の仲間と勘違いされて追い

かけられる始末。

「ぐぎゃー。何で俺が超能力者<sup>レベル5</sup>に追いかけれなちなやらねえんだー！」

（常盤台で御坂<sup>エレクトロマスター</sup>つて名前<sup>レベル5</sup>で電撃使<sup>レベル5</sup>いっつ<sup>レベル5</sup>つたら超電磁砲<sup>レベル5</sup>じゃねえか！）

少女に絡んでいた不良どもはたったの一撃でやられてしまった。実に哀れな最後だった。電撃を浴びせられて地面で変えるみたい<sup>レベル5</sup>にヒクヒク伸びている。

そして、その不良どもの後ろに隠れるような形になっていた吉梨竜治も、超電磁砲<sup>レベル5</sup>から見た視線では不良の仲間に見えたわけで、現在その不良達と同じ末路を辿るかもしれない位置に立っているのだ。面倒くさい事になってしまった、と吉梨竜治は思う。

学園都市には二三〇万もの人間がいて、その八割にも満たず学生は何かしらの能力に目覚めた能力者だ。無能力者<sup>レベル0</sup>から超能力者<sup>レベル5</sup>までの六段階に部類される能力者の内、頂点である超能力者<sup>レベル5</sup>はたったの七人しかない。

三二万八五七一分の一の才能。

追撃者はエリート中のエリートなのだ。

対して吉梨竜治はというと、万年どんけつ<sup>レベル0</sup>の無能力者。つまりは落ちこぼれ。

「私の友達に手え出しといてただで済むと思ってる訳！」「だー！ だから俺は違うんだって！」

夜の街を疾走と駆け抜けていく。実にまずい。

無能力者<sup>レベル0</sup>《レベル0》と超能力者<sup>レベル5</sup>。誰に聞くまでもなく実力ははつきりしてしまっている。

秩序とか序列と言うモノは大切なのだ。

無能力者<sup>レベル0</sup>は弱いし、超能力者<sup>レベル5</sup>は強い。

（まずい、まずいですよー！ このままじゃ）  
吉梨竜治は考える。

この場を乗り切る為の最善の方法を。

どうすれば、あの超電磁砲レイルガンから逃れられる事ができるか。

戦う事などあつてはならない。

こっちは無能力者で相手は超能力者レベル5。

その序列は絶対だ。

走っている間に大きな川に出た。都市部から離れて二・三キロと行ったところか。

その川には大きな橋が架かっている。ライトアップもされていない鉄橋の上では、周りを暗闇が支配していた。

と、

「うぎゃッ」

あるうことか、何も無い所で吉梨竜治は転んだ。

本当に何も無い、凹凸も石ころも何も無いその場所で。なんて不幸だと、頬を拭いながら立ち上がって、

「チエックメイトよ」

ゾクつと寒気が走った。

恐る恐る後ろを振り返って見ると、そこには超能力者レベル5がいた。

パチン、と彼女の茶色の髪が揺れる度に火花が散る。

なかなかご立腹のご様子だった。

と言うか、襲われてた女の子はどうしたんだ、と吉梨竜治はツッコミたくなつた。

あの場所に残してきたなら、他の不良達に絡まれる心配とかしなかったのだろうか？

「俺はあいつらの仲間じゃないんだって！」

ふーん。と軽く相槌を打つと、

「まあ、追い詰められると大体の奴がそんな事言っただけで済むよな」

「いや、ほんとだから！」

ああ、それもね。と超電磁砲レイルガンこと御坂美琴は聞く耳を持っていない。

ダメだ、と吉梨竜治はため息を付きながら最悪の展開を想定していた。

超能力者との交戦。

と言つても、無能力者と超能力者では交戦とは呼べないのかもしれない。

相手はたったの一撃で何人もの不良を地面にヒクヒクさせてしまうのだ。

たった一人の無能力者が立ち向かった所でその勝負は始まる前に分かつてしまっている。

「なあ、能力使わずにビンタとかで済ませるなんて方法はお嫌いではない？ 無能力者対処方なんてそれで十分だろ？ お互いの為に」

「大丈夫。加減はしてあげるわ。心配しなくても、気がついたら病院のベッドで目を覚ますだけだから」

これが現実。

超能力者にもなれば、赤子の手を捻る程度の力で無能力者をやる事なの造作もない。

それほどの力関係が成り立っている。

最下位の無能力者と頂点の超能力者。

その序列は覆らない。

いや、覆ってはならない。

バチバチと御坂の前髪から火花が飛び散り、瞬間、槍の様な電撃が一直線に襲いかかって来た。

避けるなんて動作は出来るはずがない。

言うなら、黒雲から落ちてくる雷をどうにかしろと言っている様なものだ。

そんな芸当を能力も何ももたない無能力者ができるはずがない。

この学園都市でもそんな事が出来るのは数えられるほどの人数しかないだろう。

ズドン！ と爆発音は音から聞こえてきた。咄嗟に顔を庇った両手を避雷針とするように電撃は暴れ、鉄橋の柱を巻き込むように飛

び散った。

「はあ、て言うかここまで追ってくる必要なかったなあ。あの子も無事だったし、失敗失敗」

目をつむって人差し指で頭をさわりながら、つぶやく御坂。

「ほんと、その通りだよ」

ビク、とその声に反応した。

「まったく、不幸だ。超能力者が無能力者の相手をする必要なんて無かったんだよ。威嚇だけしといてしつぽ巻いて逃げる様にすればよかつたんだ。無能力者なんてそんなモンだろ」

序列は絶対だ。

超能力者と無能力者の力の差は歴然で、その関係が崩れる事はない。そんな事があればそれは異常なのだ。

「無能力者が私の電撃を……？」

「だから言つたんだ。互いの為にビンタで済ませようって。そしてらこんな事にはならなかった」

啞然とする御坂に吉梨竜治は言う。

互いの為と言っているが、相手の為と言うのが一番の理由だ。

もし、

超能力者の攻撃を無能力者が防いでしまう

なんて言う事があつては超能力者の面目が丸つぶれである。

普段であるならそんな事はありえないが、例外と言うモノは存在する。

だからこそ、吉梨竜治は秩序や序列が乱れてしまう様な事は避けなかったのだ。

「何一度電撃を防いだらいい気になつてる訳？ 互いの為？ 全く、強者の言うセリフよね。超能力者バカにしてるとしか思えないわ」

バリバリ、と御坂の周囲を大量の火花が散った。

電撃が彼女の感情表現の方法なのだろうか。

明らかに、御坂はご立腹だった。

無能力者レベル0に自分の攻撃が防がれたと言う事実以前に、吉梨竜治の発言が気に食わなかったらしい。

その辺り、やはり不幸と言うべきか。

言葉の投げかけを間違えたみたいだ。

「超電磁砲レールガンって知ってる？」

「アンタの能力名だろ」

「理屈はリニアモーターカーと一緒にね、超強力な電磁石を使って金属の砲弾を打ち出す艦載兵器なんだけど」

と、御坂はポケットからコインを一枚取り出して、

「こんなコインでも音速の三倍で飛ばせば、そこそこの威力になるんだけど、どうする？」

もしかしたら、この辺で止めたいたら？　と言うサインだったのかも知らないが、ここまで来てしまったら、どっちにしるほとんど変わりはないさそうだった。

「止めといた方がいいと思うぞ。ほんと、互いの為に」  
最早言葉はなかった。

ピンッと親指によって弾かれたコインは宙を舞って、再び御坂の親指に載り、

そして

## 拒絶体質

夏休み初日、外ではグダリそうな暑さに見舞われる中、吉梨竜治は自室で禁忌とされているエアコンのスイッチに今にも手を伸ばしそうになっていた。

「又ググ、これ押しちまえばもう後には戻れねえ。電気代は増えて、来月にはラスト一週間一日一〇〇円生活なん事も有り得る。テメエにその覚悟があんのか？」

自問自答。

彼が言うように、学園都市の内部の行政は厳しい。

脳開発を行なっている分、その成績、つまりは能力に応じて生活費等が振り込まれる仕組みになっているが、吉梨竜治は無能力者<sup>レベル</sup>。

必要最低限のお金しか振り込まれないのが悲しい現実なのだ。

しかし、この暑さ。

最上階にも拘わらず窓を開けても隣の建物との間が狭く風は全く入ってこない。入ってくるのは虫だけ。昨日も実際に窓を網戸にした状態で一学期最後の学校へと行っていたのだが、帰ってきてみれば不運にも破れていた網戸から蜂が数匹迷い込んだらしく、駆除するのに苦労していたりする。

つまり、現在部屋の中は熱気に包まれており、左手に団扇、右手にエアコンのリモコンを手に葛藤していた。

「ええいダメだ！ 暑過ぎる、茹でる、倒れる！ こんな部屋で生活出来るか！ 待ってる一〇〇円生活、俺は今を取る！」

吉梨竜治は禁忌とされていた右手に持っていたリモコンのスイッチを押しした。

数分もすればこのうだる様な熱気ともおさらば。素晴らしい夏休み初日を迎える事ができる。

はずだったのだが、

「……あれ？」

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。

何度押してもクーラーの電源が入らない。

「おい、どうしたリモコン！ テメエの力はそんなモノだったのかよ」

何度押しても反応がなかったので、仕方がなく椅子を使ってエアコンの様子を見る事にした。

そつえば、掃除とかしてなかったなあ。なんて思いつつ、掃除用のモップを取りに行こうとして、

ガタ、と椅子が傾いた。

「うおお！」

バランスを崩した椅子は吉梨竜治の踏ん張りに応える事なく呆気なく転倒した。

グシャ、と何かの潰れる音が聞こえた。

「ハ、ハハハ……まさかな」

と、自分の体の下に目をやって、

そこには無残に潰れてしまったクーラーのリモコンがあった。

さらに、よく見てみると電池が入っていない。

ただそれだけのことでクーラーが起動しなかっただけなのだ。

「……よし、一〇〇円生活は免れた、と」

何事にもプラス思考が一番。と自分に言い聞かせる吉梨竜治。

と、不意に携帯電話が鳴り響いた。

担任の黄泉川愛穂からだ。

「う……何か不吉な予感」

恐る恐るボタンを押して携帯を耳に近づけると、

『吉梨、バカだから補修じゃんよ』

やっぱり、と頂垂れる。

多少は予想していた補修の連絡網。

学園都市は通常の授業の他に開発の単位も取らなければならない。

無能力者である吉梨竜治は要するに赤点だらけ。

普通の授業ではそこそ点数は取れるのだが、超能力の授業にな

るとマルツきしダメなのだ。

特に以前に行われたすけすけ見る見るに關しては最悪だった。

本来は透視能力クレアホイアンス専攻のカリキュラムのだが、成績の悪かった黄泉川クラスの補修でやらされた所、全戦全敗と言う記録を打ち立ててしまったのだ。

別に超能力の開発が嫌いだとか、勉強が苦手とかそう言った事ではない。

そもそも、超能力、と言う異能がダメなのだ。  
拒絶体質。

アレルギーの様なモノではないが、体が異能を拒絶してしまう。簡単に言えば受け付けないのだ。

いくら開発をしたところで体が拒絶してしまえば能力を扱えるはずもない。その為、無能力。

『つてな訳だから学校ちゃんと来るじゃんよ』

担任からの連絡網を受け、学校へ行く身支度を始める。

生憎冷蔵庫には何も入っていないだったので、朝ごはんはコンビニか何かで買うしかなさそうだ。

「うわ……、残金が五〇〇円」

確か、ATMの残金はまだ一万円以上残っていたはずだ、と思いつ返し一先ず一安心。

ただ、よくあるパターンとしてこういう時に限ってキャッシュカードを無くしたり、踏み砕いたりしてしまう事があるので、最善の注意を払ってキャッシュカードを扱わなければ、飢え死にしていそうである。

「とりあえず、学校行くか」

と、吉梨竜治は部屋を出た。

外は暑い。

部屋の中に比べるとほのかに風が肌に当たるので、多少マシには感じるがそれでも暑い。

日の当たらない日陰でさえこれだ、寮の外へ出てしまえばいった

いどうなるのやら。

エレベーターの近くまで来たが、表示が一階になっていたので仕方がなく階段で階を降りる事にした。

と、

何気に見上げた上部。

「あれ？ 何か飛んで来て」

目の前に何かか迫って来ていた。

白い布に包まれたそれは、なぜかコマ送りのようにはっきりと見えて、

人だった。

白い服を来た女の子が落ちてきた。

その女の子と目が合って、

「へ？」

ドス、と吉梨竜治の上に押し掛った。

状況を把握するまでにしばらく時間がかかった。

うつ伏せで倒れている自分の上に白い服、多分修道服、を来たシスターが覆いかぶさっていた。

銀髪の髪に緑色の瞳、恐らく外国人だ。

「おい、大丈夫か！？」

体は意外と丈夫な吉梨竜治にケガはなかった。階段の角にぶつかなかったのはとてつもなく運がよかったのかもしれない。実に珍しい。

が、女の子はどうだろう。

上から、ここが最上階と言う事から多分隣の寮の屋上から落ちたのだろうか？

建物の距離は二メートル、屋上までの高さはここからなら三メートルくらいある。うまく着地できれば足から頭の天辺に向かってビリビリと走る痺れ程度で済んだかもしれないが、まさしくダイブだった。

吉梨竜治がクッション代わりになったかもしれないが、それでも

どこかケガをしているかもしれない。

と、

「ん……」

少女の目が開いた。

「あれ、君は……？」

「お前上から落ちてきたけど、大丈夫か？ 怪我とかないか？」

ムクリと起き上がった少女は、吉梨竜治の心配をよそに、服を整える様な仕草をしただけで

「うん、大丈夫だよ」

見た感じでも怪我をしている様な所はなかった。

と言つても、露出している部分が極端に少ないのでなんとも言えないが、本人が言っているので問題はないのだろう。

「そっか、よかった」

改めて見ると綺麗な顔をしていた。

年齢は一四か一五と言った所か。幼さの残る容姿は言わばお人形さんだ。

女の子の顔は命よりも大事、なんて言葉を聞いた事があったので、そんな綺麗な顔を傷が無くてよかった、などと思っていいたら、

ストン、と。

「へ？」

「ん？」

少女の着ていた修道服がただの布に逆戻りした。布地を縫っている糸が全て綺麗サツパリ抜け落ちた感じだ。

互いに何が起こったのか分からず、顔を見合わせた。

が、一秒一秒と経つうちに、今の状況を理解し始めたのか、少女の顔が引き攣って行くのが目に見えた。

そして、

「ッ！」

最早声にならない悲鳴が周囲に響き渡ると共に、吉梨竜治は女の子に噛まれると言う、なんとも初めてで、珍しい珍体験を経験する

こととなった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6082w/>

---

とある異能の拒絶体質

2011年9月12日03時19分発行